金谷レース工業株式会社事務所
（かなやれーすこうぎょうかぶしきがいしゃじむしょ）

建築年：事務所・昭和初期（国登録有形文化財）

昭和初期における建造物の全国的な流行にのり、桐生市内でもスクラッチタイルを貼った建物が流行しました。この事務所は木造二階建てのスクラッチタイル貼りで、水平線を強調したライト建築の特徴をもっており、特に、窓や細部に至る意匠に時代的な特徴が見られます。事務所と鋸屋根工場を比較してみると、大正と昭和の時代的流行の違いがよくわかります。

スクラッチタイル

スクラッチタイルとは、櫛でひっかいたような模様が入っているタイルのことで、主に建築物の外壁の装飾に使われます。

流行の引き金となったのは、近代建築の巨匠 F・L・ライトの設計した「旧帝国ホテル本館（ライト館）」です。大正12年（1923）、関東大震災に襲われたとき、周辺の多くの建物が倒壊した中で、ライト館はほとんど無傷でした。これは、ライトがスクラッチ傷を意匠とした“すだれレンガ”（スクラッチタイル）を、レンガ積みの構造材としてではなく、鉄筋コンクリート構造の表面装飾材として用いたためと言われています。

また、タイルの欠点は製品に“焼きむら”が出て、何割かは無駄になってしまうことでしたが、スクラッチタイルは焼きむらがほとんどなく、無駄が生じません。

こうした経済的な理由と、陰影のある独特の肌合いも支持され、関東大震災後から昭和戦前期にかけて多くの建物に採用されました。